

平成28年度

人文社会科学部
履修案内

弘前大学人文社会科学部

目 次

1. 履修に関する一般的注意	
1) 自分の時間割は自分で作成する	1
2) 自分で情報を集める	1
3) ガイダンスにはどのようなものがあるか	1
4) 履修登録について	2
5) 各学期に履修登録できる単位数 (キャップ制)	3
2. 担任制と指導教員	
1) 主担任と副担任について	3
2) 1年次から4年次までの主担任と副担任	3
3. 教育課程 (カリキュラム) の概要	
1) 科目の区分	4
2) 卒業に必要な科目と単位数	4
3) 成績評価について	5
4. 教養教育科目の履修の仕方	6
5. 専門教育科目の履修の仕方	
1) コース所属について	
各コースの受入人数	6
コース所属の条件	6
コース所属の手続	6
コース所属の選考方法	6
コース所属決定までのスケジュール	7
2) 授業科目の種類	
講義	7
演習	7
実習	8
言語コミュニケーション実習	8
インターンシップ	8
ゼミナール	8
留学(扱)時におけるゼミナールの履修ならびに卒業研究・特定課題研究の履修	1 0
卒業研究・特定課題研究	1 1
3) 各コース教育カリキュラムと履修方法	1 1 ~ 2 1
4) 言語コミュニケーション実習の履修の仕方	2 2
6. 所属の変更	2 4
7. 進路	2 5
1) 就職について	2 5
2) 就職支援体制	2 5
3) 就職関係の情報について	2 5
4) 進学について	2 5
8. 資格取得	2 6
1) 教育職員免許状	2 6
2) 博物館学芸員の資格	2 6
3) 社会調査士の資格	2 6
弘前大学人文社会科学部規程	2 7
弘前大学人文社会科学部履修細則	4 6

1. 履修に関する一般的注意

1) 自分の時間割は自分で作成する

高校と大学とでは授業の受け方が大きく異なります。高校では時間割が全部決まっています。そのとおりに授業を受けてきました。しかし、大学では履修する科目を自分で選んで、自分の時間割を作成します。

2) 自分で情報を集める

自分の時間割を作成するためには、各種の情報を次のようにして得ます。

掲 示

大学や学部からの通知のすべてが掲示されます。非常に重要なので、大学に来たらまず掲示を見ること。掲示を確認しなかったことが原因で何か不利益をこうむった場合、自己責任となります。

ガイダンス

印刷物が配布され、重要な説明が行われます。具体的な内容や手続きなどが詳しく紹介されるので、必ず出席してください。

学生便覧

学生にとっての重要な規則などが記載されている大切な資料です。

『人文社会科学部履修案内』（本冊子）

各コースの教育カリキュラムや卒業までに必要な履修上の情報が掲載されています。

時間割表

実際の開講時間帯と教室などが示されています。毎年度または毎学期のはじめに公表されます。

シラバス

授業内容が書かれたもので、受講にあたって参考に使ってください。
シラバスは冊子で配布されるほか、弘前大学ホームページにも掲載されています。

成 績 表

単位取得状況を把握することができます。1年次後期から履修案内と対照してください。
何かわからないことがあったら、主担任の教員および副担任の教員に相談して、適切なアドバイスを受けてください。

3) ガイダンスにはどのようなものがあるか

履修の仕方など、重要な情報を得る機会がガイダンスです。印刷物も配布され、また疑問点等について直接質問できますから、必ず出席してください。

ガイダンスには、次のものがあります。

- 卒業までの単位取得に直接関わる履修のためのガイダンス
- 人文社会科学部で取得できる資格についてのガイダンス
- その他

①新入生専門教育・就職ガイダンス・・・1年次・4月はじめ

新入生全員を対象に、大学での授業の履修や学生生活の面等及び就職に関するガイダンスを実施します。『学生便覧』や『履修案内』をもとに実施しますので必ず持参してください。

②コース所属のための課程別・コース別ガイダンス・・・1年次・9月下旬予定

2年次からコースに所属します。そのための手続きや方法等について説明されます。コース選択や所属のための重要なガイダンスです。

③コースの専門教育科目履修ガイダンス・・・2年次・4月(授業開始前)

2年次から所属するコースの専門科目についての履修の仕方等について説明されます。

④ゼミナール所属ガイダンス・・・2年次・11月上旬

3年次からゼミナールに所属します。そのための手続きや方法等について説明されます。

⑤言語コミュニケーションのための実習ガイダンス・・・1年次・9月下旬予定

言語コミュニケーション実習の履修を希望する学生に対して実施されます。掲示に注意しておいてください。

⑥教職ガイダンス・・・1年次・4月はじめ

教員免許状の取得を希望する学生に対して行われます。出席者に『教育職員免許状取得の手引き』という印刷物が配布され、必要な科目の履修等について説明されます。

⑦学芸員課程ガイダンス・・・1年次・12月頃

学芸員資格の取得を希望する学生に対して実施されます。出席者に『学芸員資格取得の手引き』という印刷物が配布され、必要な科目の履修等について説明されます。

⑧社会調査士資格取得ガイダンス・・・1年次・9月下旬予定

社会調査士資格の取得を希望する学生に対して実施されます。コース所属ガイダンスの日程に合わせて行われるので、掲示に注意してください。

⑨就職ガイダンス → 「7. 進路」を見てください。

⑩留学ガイダンス → 国際教育センターが主催します。センターのHPや掲示等を確認してください。

4) 履修登録について

【基本的な原則】

授業を受けるためには、その科目を登録する必要があります。これを履修登録といいます。各学期の定められた期間内に、その学期に履修する科目の登録をしなければ単位の認定は認められません。

また、履修登録期間終了後に、一定期間、履修取り消し期間を設けます。履修取り消しの手続きをしないまま授業を放棄した場合、成績は「不可」となるので注意してください。

【登録にあたっての条件や制限がある場合】

①いくつかの科目（言語コミュニケーション実習などの実習、ゼミナール）については、プレースメントテスト（クラス編成のためのテスト）や、特別の履修登録手続きが必要となります。これらについてはその都度、掲示等で通知されます。

②授業開講時に担当教員から履修カードの提出を求められる場合があります。

③履修希望者が多い場合、人数制限が行われる場合があります。

④科目によって、履修する順序に制限が行われる場合があります。I・II等の区別がある科目は段階的な履修を前提とした科目であるため、Iを履修しなければIIを履修することができません。ただし、事情によっては履修が認められることもありますので、履修登録の前に担当教員に相談してください。

これに対してA・B等の区分がある科目は段階的な履修を前提としたものではなく、異なる科目として区別されているものです。以上のような履修上の制限はありません。いずれの科目から履修してもかまいません。

【留意事項】

履修に関して、次の規定があります(P. 46. 履修細則参照)。

- ①同一時間帯に開講される科目について、2科目以上の履修登録はできません。
 - ②同一の科目について、2回以上の重複履修は認められません。但し、1回目に単位を取得しない場合(例えば、成績が「不可」の場合)は、これに該当しません。
- ※I・II等やA・B等で区別されている科目もあります。記号が異なれば、異なる授業科目ということになります。
- たとえば、「〇〇論A」の単位を取得していても「〇〇論B」の履修登録はできます。2回以上の重複履修とは「〇〇論A」を2回以上履修登録できないということです。これはI・II等でも同様です。
- 但し、①・②等で区分されている科目は同一の科目として扱いますので、2回以上の履修は認められません。

5) 各学期に履修登録できる単位数(キャップ制)

履修登録可能な科目の単位数の上限は、1年間で教養教育科目と人文社会科学部専門教育科目を合わせて48単位まで(弘前大学における授業科目の履修登録単位数の上限に関する規程及び履修細則1条の5)と決められています。これを**キャップ制**といいます。

但し、以下の科目はキャップ制の対象科目となりません。

- ・演習科目
- ・実習科目
- ・集中講義(休業期間中に開講されるもの)
- ・ゼミナール
- ・卒業研究・特定課題研究
- ・教職関連科目のうちの**教職に関する科目**(別表第6の科目)
- ・学芸員の資格を取得するための必修(別表第7)のうちの博物館資料論、博物館資料保存論、博物館展示論、生涯学習論、博物館実習I、博物館実習II

2. 担任制と指導教員

弘前大学では全学的に担任制を導入しています。これは、学習面・生活面等での相談ごとや悩み等についてアドバイスを受けたいと思った場合に、相談窓口となって、課題の解決の糸口を与えてくれる支援体制の一つです。

ここでは、卒業までの主担任と副担任について説明します。

1) 主担任と副担任について

主担任は、各学期にクラス面談を実施するほか、必要に応じて個別面談を実施します。また、休学留学等の手続きの際に必要な措置を行うほか随時、学生の相談にのります。

副担任は、主担任とは異なる観点から意見を求めたい場合、また主担任には相談しにくいような場合などに相談にのります。副担任は、主担任の代わりに、手続き上の措置等を行う場合もあります。

2) 1年次から4年次までの主担任と副担任

主担任と副担任は、原則として、以下のとおりです。

	1年次	2年次	3年次	4年次
主担任	基礎ゼミナールの担当教員			
副担任	課程の学務委員	コースの学務委員	ゼミナールの担当教員	

※基礎ゼミナールの再履修の場合、1年次前期に担任した教員が主担任となります。

3) 成績評価について

成績評価の基準とGPA制度

- ・成績評価は、平常の学習、試験・レポートの内容等にもとづいて総合的に行われます。成績評価でどのような点が重視されるかは、各科目に関するシラバスを参照してください。成績評価は、次の5段階方式で行われます。不可の場合は、修得単位数はゼロです。
- ・人文社会科学部の成績評価においては、成績評価の各段階を4～0のポイントに区分し、GPA (Grade Point Average の略) 数値を算出します。

評価	評点	GP
秀	100～90	4
優	89～80	3
良	79～70	2
可	69～60	1
不可	59以下	0

$$GPA = \frac{(GP \times \text{修得単位数}) \text{の合計}}{\text{履修登録した総単位数}}$$

参照・・・人文社会科学部履修細則 第4条の2

異議・苦情申立て

- ・成績評価等に疑問がある場合は、成績評価を行った教員にその根拠を尋ねることができます。成績が判明した段階で、オフィスアワー等の時間を利用して、すみやかに確認を行ってください。
- ・担当教員から成績評価についての説明を受けても、なお異議がある場合、成績通知表配布開始日を含めて2週間以内に、異議申立書によって異議を申立てることができます。異議申立書の書式は、人文社会科学部教務担当で入手できます。申立書に必要事項を記入し、封をして人文社会科学部教務担当に提出してください。この申立書は人文社会科学部長が直接開封し、対応を検討します。
- ・授業等において、教員が自らの地位や立場を利用して差別的・暴力的な指導を行った場合（アカデミック・ハラスメント）には、人文社会科学部長に苦情を申立てることができます。苦情申立書は、人文社会科学部教務担当で入手できます。申立書に必要事項を記入し、封をして人文社会科学部教務担当に提出してください。この苦情申立書は、人文社会科学部長が直接開封し、対応を検討します。

不正行為

- ・期末試験および期末試験以外の試験（中間試験、小テスト等）で不正行為を行った学生に対しては、停学1か月の懲戒処分が課されます。この場合、教養教育科目・専門教育科目・国際交流科目のうち、実験・実習および実技科目を除く当該学期に履修した単位のすべてが無効になります。停学処分が下されると、4年での卒業できなくなるので注意してください。
- ・書籍、論文、インターネット上の情報等を、出典を明記することなく引用した場合（盗用・剽窃）には、不正行為とみなされるので注意してください。

4. 教養教育科目の履修の仕方

教養教育科目は弘前大学の全学生を対象として、幅広い教養を身につけることを目的とする科目です。その履修方法や時間割については、『教養教育科目履修マニュアル』と「教養教育科目時間割表」を参照してください。

なお、教養教育科目については、専門教育科目との有機的関連を図るために、以下のような推奨措置をとっています。

教養教育科目の修得方法

【全課程】

ローカル科目については、前期履修を推奨します。但し、後期における履修を妨げるものではありません。

社会・文化、自然・科学、人間・生命に関する科目については、前期履修を推奨します。但し、後期における履修を妨げるものではありません。

【文化創生課程】

文化創生課程の学生は前期・後期ともに教養教育科目「多言語」を履修することを強く推奨します。2年次以降の学部専門科目の言語コミュニケーション実習ⅠA（多言語）については、1年次における教養教育科目「多言語」の履修を前提とします。

※詳細については、新入生ガイダンスにおいて説明されます。

5. 専門教育科目の履修の仕方

専門教育科目については、1年次から履修し、2年次からは各コースに所属して履修します。1年次前期・後期には学部基本科目が開講され、1年次後期には各コースのコア科目が開講されます。所属を希望するコースに関係する科目については、必ず履修してください。

これについては新入生ガイダンスでも説明されます。

1) コース所属について

コース所属ガイダンス(1年次9月下旬予定)において具体的に説明します。必ず出席してください。ここでは重要な点をいくつか挙げておきます。

各コースの受入人数（下線を引いた人数は、各コースの基本定員）

- ・文化資源学コース 50名～55名
- ・多文化共生コース 60名～65名
- ・経済法律コース 50名～55名
- ・企業戦略コース 55名～60名
- ・地域行動コース 50名～55名

コース所属の条件

- ・単位修得上の条件は、特にありません。
 - ・但し、第一志望者がコース受入人数を超えた場合には、選考があります。
 - ・第一志望のコースに関連して、言語コミュニケーション実習の履修希望言語を記す場合もあります。
- 詳しくは「言語コミュニケーション実習の履修の仕方」を参照してください。

コース所属の手続き

- ・コース所属志望届を提出します。文化創生課程の学生の場合、コース所属志望届には第二志望まで志望順位を記入し、社会経営課程の学生の場合、第三志望まで志望順位を記入します。
- ・コース所属志望届を期日までに提出しなかったり、提出しても不備がある場合には、不利な扱いを受けることもありますので注意してください。

コース所属の選抜方法

- ・1年次前期成績のGPA数値の高い順に選抜を行います。GPA数値が同値の場合には、成績評価で「秀」の数、「優」の数、「良」の数の多い順で選抜を行います。

コース所属決定までのスケジュール

- ・コース所属ガイダンス 1年次9月下旬
- ・コース所属志望届の受付 1年次12月初旬
- ・締切り 1年次12月中旬
- ・所属コースの発表 1年次1月下旬～2月上旬(掲示)
(締切り後の所属希望コース変更は認められません。次学期以降に「6. 所属の変更」による、転コース手続きを行ってください。但し、欠員がある場合に限りです。)

2) 授業科目の種類

人文社会科学部の専門教育科目には、講義、演習、実習、ゼミナールの4種類の科目があります。これは授業形態の違いにもとづく分類です。

なお、講義とゼミナールは、各コースに設定されている科目ですが、演習と実習についてはコースによって異なります。これは各コースの教育方法による違いです。

講義

① 専門教育科目の講義

専門教育科目としての講義は、各専門分野に関する基礎的・応用的知識や技能等について学習するもの、その分野に固有のテーマ等について深く学習するものなど、多様な内容で行われます。

履修したい講義については、各コースのガイダンスやシラバス、場合によっては担当教員に対して直接質問するなどしてよく調べ、自分の履修計画を立てて履修登録をしてください。

② 必修科目・選択必修科目・選択科目

専門教育科目については、各コースの教育方針によって、各科目の位置づけが異なっており**必修科目・選択必修科目・選択科目**というように区別されています。

必修科目及び選択必修科目は重要な科目ですから、卒業に必要な単位数を十分確認して履修してください。

③ セメスター制

弘前大学では、前期(4月～9月)・後期(10月～3月)の2学期制を採っています。学期のことを**セメスター**と呼びます。講義科目は、学期単位で開講されます。

④ 履修年次

専門教育科目の多くは、2年次や3年次から履修の対象となります。1年次から履修可能な科目もあります。これについては**人文社会科学部規程別表(P. 35～)**を参照してください。また、**新入生ガイダンス**においても詳しく説明されます。

履修年次の原則として、自分の学年の上位学年に履修指定されている科目については、受講することができません。(たとえば、1年次の学生は2年次以上の学生に配当されている科目は履修できませんが、2年次以上の学生が1年次配当の授業科目を履修することはできます。)

演習

① 演習の目的

少人数方式、双方向型の授業です。その目的は、文献・資料などの解説や分析、外国書の講読等の具体的な作業を通して専門分野の理解を深めることにあります。他コースや他課程の学生も受講可能な授業であるという点がゼミナールとの違いです。

② 授業の形態

講義と同様、学期単位で開講される授業で**(セメスター制)**、履修する順番が指定されているI・II等の方式の演習と、どの順序で履修してもよいA・B等の方式の演習があります。演習の単位計算方法(履修時間数)は、講義の場合と同様です。

③ 対象年次

2年次から開講されますが、3年次以降に履修するものもあります。

④ 履修登録と定員

演習によっては、定員を設定しているものもあります。履修希望者数が多数の場合には、履修者を選考することもあります。

実 習

①実習の目的

各専門分野において必要な基礎的技能を学習するための、実地教育・実物教育を行う授業です。講義の聴講や読書からは学べない事柄を、実体験によって学びます。実習を履修することは、その分野の基本的な考え方を肌で感じ、身をもって修得する機会となります。

②授業の形態

講義の場合と同様、学期単位で開講される授業で(セメスター制)、履修する順番が指定されているⅠ・Ⅱ等の方式の実習と、どの順序で履修してもよいA・B等方式の実習があります。

実習は、2コマ連続の時間帯に開講され、講義の半分の単位計算となります。

実習には、夏期休暇中などを利用して学外へ出かけるものもあり、多様なテーマで多くの種類の実習が行われます。

テーマによって授業形態や内容が異なりますので、シラバスや各コースのガイダンスでよく確認してください。

③対象年次

2年次から開講されますが、3年次以降に履修するものもあります。

④履修登録と定員

実習によっては、履修定員を設定しているものや事前の手続が必要なものもあります。

履修希望者数が多数の場合、履修者を選考することもあります。

言語コミュニケーション実習

「言語コミュニケーション実習の履修の仕方」を参照してください。

インターンシップ(企業等実習)

①インターンシップとは

職場での実地体験をとおして、自分の資質・能力・適性を知り、将来の職業選択やキャリアアップ等の指針として役立ててもらうこと、大学での勉学においては身につけることのできない実務上の知識を修得し、現実の職場に必要な責任感や自立心を養うことを目的としています。

本学部のカリキュラムには、インターンシップA(国内)・インターンシップB(海外)があり、詳しくは掲示等でお知らせします。

キャリアセンターが主催するインターンシップもあり、インターンシップAに読み替え可能です。詳しくはキャリアセンターのHP、掲示等を確認してください。

②履修年次、定員

履修年次は3年次で、定員はその年度の実習の受入先の状況によって異なります。詳しくは、掲示等でお知らせします。

③単位認定

1週間(実働5日間、30時間程度)で1単位(最大2単位)が目安となります。

ゼミナール

①ゼミナールの目的

専門分野の知識・技能を修得するために、各専門分野のテーマに関し演習形式で行う授業です。担当教員によってスタイルは異なりますが、学生主体の研究発表とそれにもとづく討論等を中心とした少人数形式の双方向的授業です。

また、その分野に関わる講義や文献講読が行われたり、練習問題を解いたり、実技の訓練が行われる場合もあります。

ゼミナールによって、専門分野をより深く学習することができます。講義や演習、実習はゼミナールの勉強の前提であり、卒業研究はゼミナールで学習したことを自分自身の研究の成果にまとめる作業と考えることができます。どのゼミナールに所属するか、ふだんからよく調べ、じっくり考えておいてください。

②履修年次

3年次(4単位)と4年次(4単位)に履修(必修8単位)します。指導教員は原則として同一教員となります。

ゼミナールの所属期間は、3年次ゼミナール開始から2年間(以上)です。原則として、3年次ゼミナール修得後4年次ゼミナールに進みます。ゼミナール開始後、3年次のゼミナール

単位が0単位（前後期ともに未修得）の場合は卒業が1年遅れます。3年次に半期分2単位しか修得できなかった場合は、ゼミナール担当教員に相談してください。（留年回避のため）

③ゼミナール所属

ゼミナールは、2年次に所属したコースの担当教員が開講するメンバー（学生）固定の授業です。そのため各ゼミナールに参加するメンバーを決定するためのゼミナール所属手続きがあります。詳細は11月上旬にコースごとに開かれるゼミナール所属ガイダンスで説明されます。

④受入人数

原則として、一教員につき5名までは受け入れます。受入人数の上限はコースによって異なりますので、コースのゼミナール所属ガイダンスに参加して確認してください。

⑤ゼミナール所属の要件

原則として、2年間在学（休学は在学期間に算入しません）している学生が対象となります。

履修細則に、以下の修得単位数が定められています。

- ・**教養教育科目**…スタディスキル導入科目4単位を含む26単位以上
- ・**専門教育科目**…学部基本科目（グローバル実践科目を含む）10単位及びコースで指定したコア科目4単位を含む16単位以上

上記単位数を2年次終了時点で満たさなかった場合は、3年次4月からのゼミナール所属はできません。但し、3年次前期終了時点でこの単位数を満たした場合は、3年次10月からの所属が可能ですので、人文社会科学部教務担当で手続きを行ってください（この場合、ゼミナール開始が半期遅れるため卒業も半期分遅れます）。3年次4月に所属ができなかった場合は、所属を希望するゼミナールの担当教員とよく相談して、10月所属に備えた学習準備を行ってください。

⑥ゼミナール所属の手続き

◆ゼミナール所属ガイダンス

2年次後期の11月上旬にコースごとに行われます。掲示等で確認して、必ず参加してください。

◆ゼミナール見学、研究室訪問

ガイダンス終了後、ゼミナール見学および研究室訪問の期間が設定されます。この期間中にゼミナールを見学したり、関心のある研究室を訪問して、教員やゼミナールの先輩にたくさん質問してください。

◆ゼミナール所属希望届の提出

- ・ゼミナール見学後、所定の**ゼミナール所属希望届**に第3希望まで書いて、期限までに人文社会科学部教務担当に提出します。その際、必ず第1希望ゼミナールの担当教員に押印してもらってください。
- ・**コース会議**の協議を経て、各ゼミナールに所属することになる学生の学籍番号・氏名等がコースごとに発表されます。

⑦ゼミナール所属決定までのスケジュール

- ・ゼミナール所属ガイダンス…11月上旬
- ・ゼミナール見学、研究室訪問期間…11月後半（ガイダンス終了後2週間程度）
- ・ゼミナール所属希望届提出…原則ゼミナール見学期間最終日17:00まで
- ・所属ゼミナールの決定・発表…12月上旬～1月上旬

⑧ゼミナール所属手続き時に不在の場合

ゼミナール所属手続き時に休学・留学（扱）などで事前に不在になることがわかっている場合は、休学・留学（扱）手続きと同時に、事前に所定のゼミナール希望届を提出することが可能です。詳細は人文社会科学部教務担当もしくは主担任又は副担任の教員に尋ねてください。

⑨転ゼミナール

ゼミナールに所属すると、原則として、2年間、同じ教員の指導を受けることになります。しかし事情によっては、転ゼミナールが認められる場合があります。転ゼミナールを希望する場合は、主担任又は副担任の教員に相談してください。（転ゼミナールについては〔6. 所属の変更〕も参照してください。）

⑩所属ゼミナール以外のゼミナール受講について

所属したゼミナール以外の（他コース・他課程を含む）ゼミナールを受講することも可能です。修得した単位は**本学部及び他学部で開設している教養科目又は専門教育科目**として認められます。但し、他のゼミナールを受講する場合は、（1）受講を希望するゼミナールの定員に空きがあること、（2）所属ゼミナールと受講を希望するゼミナールの担当教員双方の了解を得ていることが必要です。

留学（扱）時におけるゼミナールの履修ならびに卒業研究・特定課題研究の履修

①ゼミナール履修

留学（扱）時においても、ゼミナールを履修することが可能です。ここでいう留学（扱）とは、学費を納め、在学（在籍）扱いになっている者の留学を指します。従って、休学して留学する場合は含まれません。

この場合、Eメールによる指導やレポートの提出などのようなゼミナール担当教員による定期的な指導を受けることが必要になります。そのほかにも条件がつく場合もありますので、詳細は各ゼミナール担当の教員に尋ねてください。

②ゼミナール所属手続き

ゼミナール所属手続き時に留学（扱）で不在になることがわかっている場合は、留学（扱）手続きと同時に、事前に所定のゼミナール希望届を提出することが可能です。詳細は人文社会科学部教務担当もしくは主担任又は副担任教員に尋ねてください。（ゼミナール⑧参照）

③卒業研究・特定課題研究の履修

留学（扱）時においても、卒業研究・特定課題研究を履修することが可能です。

この場合、Eメールによる指導やレポート提出などのようなゼミナール担当教員による定期的な指導を受けることが必要になります。そのほかにも条件がつく場合がありますので、詳細は各ゼミナール担当の教員に尋ねてください。

卒業研究・特定課題研究

①卒業研究・特定課題研究

卒業にあたって、大学4年間の学習の集大成としての成果を自らの研究という形にまとめあげる作業と作品であり、**卒業研究（6単位）**か**特定課題研究（4単位）**のいずれかを選択することができます。

指導教員の指導を受けながら、自主的に調査・研究を進め、充実した納得できる作品を作り上げてください。

なお、作成にあたっては、指導教員より**研究倫理教育**を受け、不正や不備がないよう努めなければなりません。具体的には、先行研究の引用においては出典を明示すること、自説を提示する場合に論拠を示すこと、先行研究の剽窃禁止、データ捏造禁止等が挙げられます。また、研究テーマごとに様々な留意点があります。たとえば、人を対象とした調査・研究においては、対象者の同意とデータの適切な管理・利用が求められます。不明な場合は必ず指導教員に相談し、その指示に従ってください。

②特定課題研究として認められるもの

- 調査報告書の場合、単なるデータの報告にとどまらず、調査結果についての「分析・考察」を含むこと。
- コンピュータプログラムの場合、プログラムリストのほかに、そのプログラムの使用説明書マニュアルや、設計のもとになる基本的な考え方を述べたプログラム解説書等を添えること。
- その他、上記2例に準じて、何らかの分析・考察を記した文書を添えること。

③卒業研究・特定課題研究の表紙、分量の目安

卒業研究・特定課題研究を提出する場合、所定の用紙を貼り付けます。この用紙は人文社会科学部教務担当で配布します。

卒業研究の分量の目安は、次のとおりですが、具体的には指導教員に相談してください。

邦文の場合、「20,000字以上」

欧文の場合、「約6,500語以上」（1ページ65ストローク×25行、20枚以上）

特定課題研究の分量の目安は、次のとおりですが、具体的には指導教員に相談してください。

邦文の場合、「12,000字以上」

欧文の場合、「約4,000語以上」（1ページ65ストローク×25行、12枚以上）

④指導教員

4年次ゼミナール担当教員が指導教員となります。

⑤口述試験(卒業研究試験)

卒業研究・特定課題研究を提出後、内容についての口述試験を行います。
口述試験には、主査(指導教員)と副査(他の教員)が出席します。

⑥卒業研究・特定課題研究に関するスケジュール(当日休日の場合は直近の平日)

- ◆卒業研究・特定課題研究題目届提出締切・・・・・・・・4年次10月15日
- ◆卒業研究・特定課題研究提出締切・・・・・・・・4年次1月10日
- ◆口述試験・・・・・・・・4年次1月末から2月上旬までの間に実施

3)各コース教育カリキュラムと履修方法

次ページから、各コースでの履修の仕方について説明します。

その中で、コア科目という用語が使われていますが、これは、その履修分野に配置される科目の位置づけをあらわすものです。

コア科目とは、その履修分野における最も中心的な科目と定義されます。つまり、その分野を修める学生ならば誰でも修得しておくべき科目ということになります。

課 程 名	コ ー ス 名
文化創生課程	文化資源学コース
	多文化共生コース
社会経営課程	経済法律コース
	企業戦略コース
	地域行動コース

文化創生課程 文化資源学コース

教育目標

人類が生み出してきた豊かな有形・無形の文化（文化財・美術工芸・民俗・宗教・言語・文学・思想など）について多様な視点から専門知識・技能を学んでいきます。体系的な学習を通じて文化の新たな価値と活用の可能性に気づきつつ、それらの価値や魅力を人類共通の文化遺産として国内外に伝えていく人材、あるいは地域や文化の振興に生かすことのできる人材の育成を目指します。

区分	年次	科目の区分及び授業科目名	所要 単位					
教養教育科目	1年次 ～ 4年次	スタディスキル導入科目 4単位 英語 8単位 ローカル科目 2単位 グローバル科目 2単位 社会・文化 2単位 自然・科学 2単位 人間・生命 2単位 キャリア形成の基礎 2単位 キャリア形成の発展 2単位 学部越境型地域志向科目 2単位 多言語Ⅰ・Ⅱ 8単位（推奨） 適宜修得科目 6単位（多言語を選択した場合は不要）	34					
	1年次前期	学部基本科目 8単位（歴史学入門，哲学倫理入門，言語学入門，文学入門，社会学入門，経済学入門，経営学入門，会計学入門，統計学入門，法学入門から4科目必修選択）	90					
1年次後期	学部基本科目 2単位（グローバル実践科目） 文化資源学 形態文化論 形態文化史（文化資源学を含む，2科目4単位）							
2年次前期 （基礎科目）	（3科目6単位） 民俗と文化 言語と文化 文学と文化 思想と文化 （10科目20単位）							
2年次 （発展科目）	<table border="1"> <tr> <th>〈文化財学系〉</th> <th>〈言語学・文学系〉</th> <th>〈倫理・思想学系〉</th> </tr> <tr> <td>日本考古学 西洋考古学 芸術史 文化財論 民俗学 文化財科学</td> <td>日本語学 言語学 日本古典文学 日本近現代文学 言語学演習 中国文学A・B 漢文学A・B 書道Ⅰ</td> <td>日本倫理思想 西洋倫理思想 東アジア思想</td> </tr> </table>	〈文化財学系〉		〈言語学・文学系〉	〈倫理・思想学系〉	日本考古学 西洋考古学 芸術史 文化財論 民俗学 文化財科学	日本語学 言語学 日本古典文学 日本近現代文学 言語学演習 中国文学A・B 漢文学A・B 書道Ⅰ	日本倫理思想 西洋倫理思想 東アジア思想
	〈文化財学系〉	〈言語学・文学系〉		〈倫理・思想学系〉				
	日本考古学 西洋考古学 芸術史 文化財論 民俗学 文化財科学	日本語学 言語学 日本古典文学 日本近現代文学 言語学演習 中国文学A・B 漢文学A・B 書道Ⅰ		日本倫理思想 西洋倫理思想 東アジア思想				
博物館概論 博物館経営論 博物館教育論								
（2科目4単位）（ⅠとⅡを連続して履修） <table border="1"> <tr> <th>〈文化財学系〉</th> <th>〈言語学・文学系〉</th> <th>〈倫理・思想学系〉</th> </tr> <tr> <td>考古学実習Ⅰ・Ⅱ 美術史実習Ⅰ・Ⅱ 文化財論実習Ⅰ・Ⅱ 民俗学実習Ⅰ・Ⅱ 文化財科学実習Ⅰ・Ⅱ</td> <td>日本語学演習Ⅰ・Ⅱ 日本古典文学演習Ⅰ・Ⅱ 日本近現代文学演習Ⅰ・Ⅱ</td> <td>日本倫理思想演習Ⅰ・Ⅱ 西洋倫理思想演習Ⅰ・Ⅱ</td> </tr> </table>	〈文化財学系〉	〈言語学・文学系〉		〈倫理・思想学系〉	考古学実習Ⅰ・Ⅱ 美術史実習Ⅰ・Ⅱ 文化財論実習Ⅰ・Ⅱ 民俗学実習Ⅰ・Ⅱ 文化財科学実習Ⅰ・Ⅱ	日本語学演習Ⅰ・Ⅱ 日本古典文学演習Ⅰ・Ⅱ 日本近現代文学演習Ⅰ・Ⅱ	日本倫理思想演習Ⅰ・Ⅱ 西洋倫理思想演習Ⅰ・Ⅱ	
〈文化財学系〉	〈言語学・文学系〉	〈倫理・思想学系〉						
考古学実習Ⅰ・Ⅱ 美術史実習Ⅰ・Ⅱ 文化財論実習Ⅰ・Ⅱ 民俗学実習Ⅰ・Ⅱ 文化財科学実習Ⅰ・Ⅱ	日本語学演習Ⅰ・Ⅱ 日本古典文学演習Ⅰ・Ⅱ 日本近現代文学演習Ⅰ・Ⅱ	日本倫理思想演習Ⅰ・Ⅱ 西洋倫理思想演習Ⅰ・Ⅱ						
3年次 （応用科目）	（2科目4単位）（Ⅰ・Ⅱの科目については，連続して履修することを推奨） <table border="1"> <tr> <th>〈文化財学系〉</th> <th>〈言語学・文学系〉</th> <th>〈倫理・思想学系〉</th> </tr> <tr> <td>考古学フィールドワーク実習Ⅰ・Ⅱ 美術史資料実習Ⅰ・Ⅱ 文化財保存活用実習Ⅰ・Ⅱ 民俗誌実習Ⅰ・Ⅱ 保存科学実習Ⅰ・Ⅱ</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	〈文化財学系〉	〈言語学・文学系〉	〈倫理・思想学系〉	考古学フィールドワーク実習Ⅰ・Ⅱ 美術史資料実習Ⅰ・Ⅱ 文化財保存活用実習Ⅰ・Ⅱ 民俗誌実習Ⅰ・Ⅱ 保存科学実習Ⅰ・Ⅱ			
	〈文化財学系〉	〈言語学・文学系〉	〈倫理・思想学系〉					
考古学フィールドワーク実習Ⅰ・Ⅱ 美術史資料実習Ⅰ・Ⅱ 文化財保存活用実習Ⅰ・Ⅱ 民俗誌実習Ⅰ・Ⅱ 保存科学実習Ⅰ・Ⅱ								
文化資源活用論 地域文化振興論 地域文化振興実習								
3年次	ゼミナール（前期2単位・後期2単位）							
4年次	ゼミナール（前期2単位・後期2単位） 卒業研究（6単位）又は 特定課題研究（4単位）							
1年次後期 ～4年次 （選択科目）	文化資源学コース特設講義と他コース開講科目（歴史基礎論A・歴史基礎論B・日本史・中国史・西洋史・人類学・インターンシップA）（8単位）							
1年次～ 4年次	本学部及び他学部で開設している教養教育科目又は専門教育科目 20単位（特定課題研究を選択する場合は22単位）							
合 計			124					

[教養教育科目の履修]

(1) 英語，多言語

英語（必修）以外に，多言語を履修することを強く推奨します。

(2) ローカル科目，グローバル科目，社会・文化，自然・科学，人間・生命

文化資源学コース担当教員の科目の履修を勧めます。

[専門教育科目の履修]

(1) 学部基本科目

1年次前期に開講される入門科目については、「歴史学入門」，「哲学倫理入門」，「言語学入門」，「文学入門」を中心に履修することを勧めます。

(2) コア科目

文化資源学コースに所属を希望する学生は，1年次後期に開講される「コア科目」から，「文化資源学（必修）」を含めて2科目（4単位）を選択して履修する必要があります。「文化資源学」のコアとなる考え方が提供されます。

(3) 2年次以降の講義・実習・演習とゼミナール・卒業研究（又は特定課題研究）

文化資源学コースで開講される授業科目は，文化財学系，言語学・文学系，倫理・思想学系という3つの専門分野に大きく分かります。4年次での卒業研究（又は特定課題研究）でこの3つの専門分野のうちどれを選ぶのかをある程度念頭におきながら，2年次以降に開講される授業の履修計画を立ててください。基礎から応用へと科目内容は高度化しますので，系統的な履修が求められます。文化財学系を志望する場合は，有形・無形文化財の取り扱いやフィールドワークを伴う実習があります。2年次の実習・演習は連続的に履修し，3年次の実習は連続的に履修することを強く推奨します。言語学・文学系と，倫理・思想学系を志望する場合は，文献資料の読解を行う演習があります。

3年次以降は，教員が個別に開講するゼミナールに所属し，卒業研究（又は特定課題研究）に向けての専門的な指導を受けることになります。

(4) 文化資源活用論 地域文化振興論 地域文化振興実習

文化資源活用論では，考古・芸術・民俗・宗教・言語・文学・思想の6つの系統から，人間の文化を資源として活用する方法や意義，その際の問題点について学びます。

地域文化振興論では，考古・芸術・民俗・言語・文学等の分野で，地域で活動する専門家をゲスト講師として招き，携わっている地域文化の現状や問題点，今後の展望等について講義してもらいます。

地域文化振興実習では，地域の博物館・美術館・文学館等の文化施設に赴き，文化振興の現状を実際に学んで，よりよい振興のあり方・方法等について学びます。

(5) 選択科目

選択科目は文化資源学コース特設講義及び本コースの学習内容と関連の深い他コースの授業です。学生のみなさんの関心に基づいて履修してください。

(6) 本学部及び他学部で開設している教養教育科目 又は専門教育科目

文化資源学コースでは，卒業に必要な単位のうち20単位（特定課題研究を選択する場合は22単位）は適宜選択科目としています。これには本コース開講科目はもちろん，本学部の他コース・他学部の開講科目を含むことができます。教養教育科目は4単位までとします。なお，別表第6教職に関する科目及び別表第7学芸員の資格を取得するための授業科目の中の必修科目（但し「博物館概論」，「博物館経営論」，「博物館情報・メディア論」，「博物館教育論」を除く）は，含めることはできません。

文化創生課程 多文化共生コース

教育目標

本コースは、英語をはじめ外国語の高い運用能力に裏打ちされた多角的な文化理解に基づいて、多様性の認識とグローバルマインド、さらには柔軟で主体的な思考力と判断力を養成し、国内外の正しい歴史・文化理解をもとに、世界情勢を的確に見極めつつ、地域社会のグローバル化の推進に貢献できる人材を育成します。

区分	年次	科目の区分及び授業科目名	所要 単位
教養 教育 科目	1年次 ～ 4年次	スタディスキル導入科目 4単位 英語 8単位 ローカル科目 2単位 グローバル科目 2単位 社会・文化 2単位 自然・科学 2単位 人間・生命 2単位 キャリア形成の基礎 2単位 キャリア形成の発展 2単位 学部越境型地域志向科目 2単位 多言語Ⅰ・Ⅱ 8単位(推奨) 適宜修得科目 6単位(多言語を選択した場合は不要)	34
	1年次前期	学部基本科目 8単位 (歴史学入門, 哲学倫理入門, 言語学入門, 文学入門, 社会学入門, 経済学入門, 経営学入門, 会計学入門, 統計学入門, 法学入門から4科目必修選択)	
専門 教育 科目	1年次後期	学部基本科目 2単位(グローバル実践科目) 多文化共生論 グローバルコミュニケーション論A 文学基礎論A 歴史基礎論A 地域基礎論A 国際共生論A (多文化共生論を含む3科目6単位)	
	2年次前期 (基礎科目)	言語コミュニケーション実習ⅠA(英語・多言語) トラベルスタディーズA(夏季休業に実施) 人文地理A, 自然地理A, 地誌A 〈歴史文化学系〉 〈外国語・外国文学系〉 〈地域学系〉 歴史文化演習A グローバルコミュニケーション論B 地域基礎論B 歴史基礎論B 文学基礎論B 国際共生論B 多文化基礎論	
	2年次後期 (基礎・発展科目)	言語コミュニケーション実習ⅠB(英語・多言語) トラベルスタディーズB(春季休業に実施) 人文地理B, 自然地理B, 地誌B 〈歴史文化学系〉 〈外国語・外国文学系〉 〈地域学系〉 歴史文化演習B 英語学A・B 欧米文化論A・B 日本史 英米文学A・B アジア地域学A・B 中国史 言語文化論 ヨーロッパ地域学 西洋史 アメリカ・オセアニア地域学A・B ユーラシア史 沿岸アジア史 西洋古典文化論	90
	3年次	ゼミナール(前期2単位・後期2単位) (応用科目) 言語コミュニケーション実習ⅡA・B(英語) 言語コミュニケーション実習ⅡA・B(多言語)	
	4年次	ゼミナール(前期2単位・後期2単位) (応用科目) 卒業研究(6単位)又は 特定課題研究(4単位) 言語コミュニケーション実習ⅢA・B(英語)	
	1年次後期 ～4年次 (選択科目)	多文化共生コース特設講義と他コース開講科目(文化資源学・言語と文化・社会調査論・社会学・マイクロ経済学Ⅰ・公法学・経営戦略論・インターンシップA)8単位	
	1年次～ 4年次	本学部及び他学部で開設している教養教育科目 又は専門教育科目 20単位(特定課題研究を選択する場合は22単位)	
	合 計		

[教養教育科目の履修]

(1) 英語, 多言語

多文化共生コースを志望する場合は、英語（必修）以外に、多言語（ドイツ語Ⅰ・Ⅱ、フランス語Ⅰ・Ⅱ、中国語Ⅰ・Ⅱ）の履修を強く推奨します。2年次以降の言語コミュニケーション実習（多言語）は、これらの履修を前提とします。

(2) ローカル科目, グローバル科目, 社会・文化, 自然・科学, 人間・生命

多文化共生コース担当教員の科目の履修を勧めます。

[専門教育科目の履修]

(1) 学部基本科目

1年次前期に開講される入門科目については、「歴史学入門」、「哲学倫理入門」、「言語学入門」、「文学入門」を中心に履修することを勧めます。

(2) コア科目

多文化共生コースに所属を希望する学生は、1年次後期に開講される「コア科目」から、「多文化共生論（必修）」を含めて3科目（6単位）を選択して履修する必要があります。「多文化共生」のコアとなる考え方が提供されます。

(3) 言語コミュニケーション実習（英語・多言語）

言語コミュニケーション実習ⅠA～ⅡB（英語）とⅠA・ⅠB（多言語）は必修です。また、ⅢA・ⅢB（英語）とⅡA・ⅡB（多言語）は選択科目ですが、履修を強く推奨します。

(4) 2年次以降の講義・演習とゼミナール・卒業研究（又は特定課題研究）

多文化共生コースで開講される授業科目は、歴史文化学系、外国語・外国文学系、地域学系という3つの専門分野に大きく分かれます。4年次での卒業研究（又は特定課題研究）でこの3つの専門分野のうちどれを選ぶのかをある程度念頭におきながら、2年次以降に開講される授業の履修計画を立ててください。基礎から応用へと科目内容は高度化しますので、系統的な履修が求められます。また、歴史文化学系を志望する場合は、文献資料・研究論文の講読やフィールドワークなどを行なう「歴史文化演習A・B」の履修を強く推奨します。

3年次以降は、教員が個別に開講するゼミナールに所属し、卒業研究（又は特定課題研究）に向けての専門的な指導を受けることになります。

(5) トラベルスタディーズA・B

トラベルスタディーズAは主に英語圏を、Bは主に非英語圏を実習の対象とし、学生は学部教員の引率のもと、夏季もしくは春季休業中に海外の協定大学を訪問します。外国の文化に直接接触れ、外国語を用いて様々な人と接することを通じて異文化理解を深め、コミュニケーション能力を磨くことを目的とします。

(6) 選択科目

選択科目は多文化共生コース特設科目及び本コースの学習内容と関連の深い他コースの授業です。学生のみなさんの関心に基づいて履修してください。

(7) 本学部及び他学部で開設している教養教育科目 又は専門教育科目

多文化共生コースでは、卒業に必要な単位のうち20単位（特定課題研究を選択する場合は22単位）は適宜選択科目としています。これには本コース開講科目はもちろん、本学部の他コース・他学部の開講科目を含むことができます。教養教育科目は4単位までとします。なお、別表第6教職に関する科目及び別表第7学芸員の資格を取得するための授業科目の中の必修科目（「博物館概論」、「博物館経営論」、「博物館情報・メディア論」、「博物館教育論」を除く）は、含めることはできません。

[教養教育科目の履修]

(1) 英語，多言語

英語は、必修になります。多言語(ドイツ語Ⅰ・Ⅱ、フランス語Ⅰ・Ⅱ、中国語Ⅰ・Ⅱ)は、各自の興味関心に応じて履修してください。

(2) ローカル科目，グローバル科目，社会・文化，自然・科学，人間・生命，学部越境型地域志向科目，キャリア形成の発展

経済法律コース担当教員の科目の履修を勧めます。

[専門教育科目の履修]

(1) 学部基本科目

1年次前期に開講される入門科目については、「経済学入門」「法学入門」を中心に履修することを勧めます。

(2) コア科目

1年次後期および2年次前期に開講されるコア科目の中から、「経済法律基礎演習Ⅰ・Ⅱ」(必修)を含む5科目(10単位)を修得する必要があります。

(3) 基礎科目

経済法律コースのカリキュラムは、公共政策系、経済政策系、雇用・生活政策系をバランス良く配置しています。科目の選択にあたっては、各自が目的意識をもって、それぞれの領域ごとに基礎から発展、応用へと系統的に学習を進めていくと、より学習効果が期待できます。基礎科目は、15科目のうちから6科目(12単位)を修得する必要があります。

(4) 発展科目

発展科目は、基礎科目で得た知識を前提により実践的な授業が展開されます。13科目のうちから6科目(12単位)を修得する必要があります。

(5) 応用科目

応用科目は、これまでの講義で得た知識を実践的に活かす課題解決型の授業が行われます。8科目のうちから2科目(4単位)を修得する必要があります。

(6) ゼミナール・卒業研究(又は特定課題研究)

3年次以降は、教員が個別に開講するゼミナールに所属し、卒業研究(又は特定課題研究)に向けての専門的な指導を受けることとなります。ゼミナール(合計8単位)は必修で、卒業研究(6単位)と特定課題研究(4単位)はどちらかを必ず修得する必要があります。

なお、卒業研究を履修するためには、基礎的な知識水準として経済学検定200点以上のスコア、あるいは法学検定試験ベーシックコースの取得が目安となります。

(7) 選択科目

選択科目は経済法律コース特設講義及び本コースの学習内容と関連の深い他コースの授業です。学生のみなさんの関心に基づいて履修してください。

(8) 本学部及び他学部で開設している教養教育科目又は専門教育科目

経済法律コースでは、卒業に必要な単位のうち20単位(特定課題研究を選択する場合は22単位)は適宜選択科目としています。これには本コース開講科目はもちろん、教養教育科目、本学部の他コース・他学部の開講科目を含むことができます。教養教育科目4単位までとします。なお、別表第6教職に関する科目及び別表第7学芸員の資格を取得するための授業科目の中の必修科目(「博物館概論」、「博物館経営論」、「博物館情報・メディア論」、「博物館教育論」を除く)は、含めることはできません。

社会経営課程 企業戦略コース

教育目標

本コースでは、i) 経営学・会計学の専門的・体系的知識の習得とそれらを実践的に活用する能力の養成、ii) 経営管理・経営の合理化・企業の社会的責任等に関する専門知識の習得とそれらを実践的に活用する能力の養成、iii) 企業のグローバル化が地域社会にもたらす影響等についての課題認識の習得、を通じて、地域産業の育成と発展に寄与する人材を育成します。

文字囲み部分＝コア科目、ゴシック＝必修科目

区分	年次	科目の区分及び授業科目名	所要 単位		
教養科目	1～4年次	スタディスキル導入科目 4単位 英語 8単位 ローカル科目 2単位 グローバル科目 2単位 社会・文化2単位 自然・科学2単位 人間・生命2単位 キャリア形成の基礎 2単位 キャリア形成の発展 2単位 学部越境型地域志向科目 2単位 多言語Ⅰ・Ⅱ 8単位 適宜修得科目 6単位（多言語を選択した場合は不要）	34		
専門教育科目	1年次前期	学部基本科目 8単位（歴史学入門、哲学倫理入門、言語学入門、文学入門、社会学入門、経済学入門、経営学入門、会計学入門、統計学入門、法学入門から4科目選択必修）	90		
	1年次後期	学部基本科目 2単位（グローバル実践科目） 経営戦略論 簿記システムⅠ ベンチャービジネス論		（選択科目） ミクロ経済学Ⅰ マクロ経済学Ⅰ 社会学	
	2年次前期 （基礎科目）	（経営学基礎科目） 経営管理論 企業経営史Ⅰ （商学基礎科目） マーケティング論Ⅰ 事業計画演習Ⅰ		（会計学基礎科目） 簿記システムⅡ 財務会計Ⅰ 原価計算 （情報処理基礎科目） 地域データ分析Ⅰ	（選択科目） 国際経済学 商法 民法 言語コミュニケーション実習ⅠA(英語) 職業指導 企業戦略コース特設講義A
	2年次後期 （基礎科目）	（経営学基礎科目） 経営組織論 企業経営史Ⅱ （商学基礎科目） マーケティング論Ⅱ 事業計画演習Ⅱ		（会計学基礎科目） 財務会計Ⅱ 管理会計 （情報処理基礎科目） 地域データ分析Ⅱ	（選択科目） 企業戦略コース特設講義B
	3年次 （発展・応用科目）	（経営学発展科目） 地域イノベーション論Ⅰ・Ⅱ 現代企業論Ⅰ・Ⅱ 社会的企業論 グローバル経営論Ⅰ・Ⅱ （応用科目） インターンシップA・B スタディツアー ビジネス戦略実習Ⅰ・Ⅱ ゼミナール（前期2単位・後期2単位）		（会計学発展科目） 税務会計A・B	（選択科目） 地域文化振興論 企業戦略コース特設講義C 企業戦略コース特設講義D
	4年次 （応用科目）	プロジェクトマネジメント実習Ⅰ・Ⅱ ゼミナール（前期2単位・後期2単位） 卒業研究（6単位）又は 特定課題研究（4単位）			
		本学部及び他学部で開設している教養教育科目 又は専門教育科目 20単位（特定課題研究を選択する場合は22単位）			
合計			124		

[教養教育科目の履修]

教養科目の履修案内を参考にして卒業に必要な単位を修得してください。実社会で必要とされる幅広い教養を身につけましょう。

“ローカル科目”，“グローバル科目”，“社会・文化”，“自然・科学”，“人間・生命”については、企業戦略コース担当教員の科目の履修を勧めます。

[専門教育科目の履修]

(1) 学部基本科目

1年次前期に開講される入門科目については、「経営学入門」，「会計学入門」，「統計学入門」に加えて、「経済学入門」や「法学入門」，「社会学入門」の履修を勧めます。学部基本科目については、グローバル実践科目を含む、5科目10単位を修得する必要があります。

(2) コア科目

企業戦略コースに所属を希望する学生は、1年次後期に開講される、「経営戦略論」，「ベンチャービジネス論」，「簿記システムⅠ」の3科目（6単位）すべてを修得する必要があります。これらは、本コースで2年次以降に開講される科目の基礎となります。

「経営戦略論」及び「簿記システムⅠ」の専門学習をとおして、企業経営の基礎を理解します。「ベンチャービジネス論」では、地域の起業家等をゲストスピーカーに迎えて授業を展開することによって、受講学生にロール・モデルを提示しながら、起業家精神の醸成を図るとともに、地域で起業することの社会的意義と可能性について考える機会を提供します。

(3) 基礎科目

「事業計画演習Ⅰ」及び「事業計画演習Ⅱ」は、コア科目や経営学基礎科目・会計学基礎科目の学びを応用し、実践的に活用するための演習科目です。授業の展開にあたっては実務家と連携しながら、反転型の授業形式や課題解決型授業等を積極的に取り入れ、事業を興すために必要な実践的な知識の習得を行う必修科目です。

基本科目については、「事業計画演習Ⅰ」，「事業計画演習Ⅱ」を含む、10科目20単位以上を修得する必要があります。開講されるすべての科目の履修を強く推奨します。

(4) 発展科目

発展科目については、4科目8単位以上の修得が必要です。開講されるすべての科目について、学生のみなさんの積極的な履修を強く推奨します。

(5) 応用科目

「ビジネス戦略実習Ⅰ」及び「ビジネス戦略実習Ⅱ」は、コア科目、基礎科目、発展科目で学んだ専門知識や「事業計画演習Ⅰ・Ⅱ」で習得した実践的知識を活用し、地域企業との連携のもとに、課題解決型学習（商品開発企画、販売企画の考案等）をとおして課題発見力・課題解決力・企画提案力・コミュニケーション力等を高める必修科目です。また、こうした応用、実践を通して専門知識の定着を図ります。

応用科目については、「ビジネス戦略実習Ⅰ」，「ビジネス戦略実習Ⅱ」を含む、3科目6単位以上を修得する必要があります。

(6) ゼミナール・卒業研究（又は特定課題研究）

3年次以降は、教員が個別に開講するゼミナール（必修科目）に所属し、卒業研究（又は特定課題研究）に向けての専門的な指導を受けることとなります。

(7) 選択科目

選択科目は「企業戦略コース特設講義」及び本コースの学習内容と関連の深い他コース担当の教員により開講される授業です。ここで、「企業戦略コース特設講義」とは、企業からの寄附講義など必ずしも定期的開催されるとは限らない科目の総称です。掲示やシラバスを参考にして、学生のみなさんの関心に基づいて履修してください。なお、言語コミュニケーション実習ⅠA（英語）を履修した場合は、続けて言語コミュニケーション実習ⅠB（英語）を履修することを推奨します。

(8) 本学部及び他学部で開設している教養教育科目 又は専門教育科目

企業戦略コースでは、卒業に必要な単位のうち20単位（特定課題研究を選択する場合は22単位）は適宜選択科目としています。これには本コース開講科目はもちろん、本学部の他コース・他学部の開講科目を含むことができます。教養教育科目は4単位までとします。なお、別表第6教職に関する科目及び別表第7学芸員の資格を取得するための授業科目の中の必修科目（「博物館概論」，「博物館経営論」，「博物館情報・メディア論」，「博物館教育論」を除く）は、含めることはできません。

社会経営課程 地域行動コース

教育目標

本コースでは、一つの柱として、社会学、社会心理学、社会言語学、人類学などで培われた地域社会に関する理論を学び、他方の柱として、地域を把握する統計的データ分析手法、社会調査技術、地理情報処理などのスキルを修得する。現在、我が国全体でも、地域スケールにおいても、少子高齢化、人口減少などの課題が山積しているが、これら問題の現状を正確に捉え、将来を予測し、課題解決策を施策・事業として提案できる人材を輩出することを目指す。

文字囲み部分=コア科目, **ゴチック**=必修科目

区分	年次	科目の区分及び授業科目名	単位		
教養科目	1年次 ～ 4年次	スタディスキル導入科目 4単位 英語 8単位 ローカル科目 2単位 グローバル科目 2単位 社会・文化 2単位 自然・科学 2単位 人間・生命 2単位 キャリア形成の基礎 2単位 キャリア形成の発展 2単位 学部越境型地域志向科目 2単位 適宜修得科目 6単位	34		
	1年次前期	学部基本科目 8単位 (歴史学入門 哲学倫理入門 言語学入門 文学入門 社会学入門 経済学入門 経営学入門 会計学入門 統計学入門 法学入門 から4科目必修選択)			
専門教育科目	2年次前期 ・コア科目6単位 ・選択科目1～3年次計8単位	学部基本科目のうちのグローバル実践科目 2単位 社会調査論 2単位 社会学 人類学 社会心理学 社会言語学 から4単位	(選択科目) 地域基礎論 A 多文化共生論 マクロ経済学 I	本学部及び他学部で開設している教養教育科目又は専門教育科目20単位(特定課題研究を選択する場合は22単位)	
	2年次前期 ・基礎科目12単位 ・選択科目1～3年次計8単位	住民生活論 A 住民ネットワーク論 A 住民参画論 A 地域情報論 A 基礎地理学 A 地域地理学 A 統計データ分析 A ----- 社会調査設計演習 地域行動論演習 A 社会調査実習 I*・地域アクションリサーチ実習 I*	(選択科目) 労働法 職業指導 言語コミュニケーション実習 I A (英語) 地域行動コース特設講義 A		
	2年次後期 ・発展科目12単位 ・選択科目1～3年次計8単位	住民生活論 B 住民ネットワーク論 B 住民参画論 B 地域情報論 B 基礎地理学 B 地域地理学 B 統計データ分析 B ----- 量的社会調査演習 地域行動論演習 B 社会調査実習 II*・地域アクションリサーチ実習 II*	(選択科目) 民俗学 言語コミュニケーション実習 I B (英語) 地域行動コース特設講義 B		
	3年次前期 ・応用科目3年次計8単位 ・選択科目1～3年次計8単位	環境地理学 A ----- 住民ファシリテーション演習 A 地域行動論演習 C 地域協働実習 I*・地域フィールドワーク実習 I* 3年次ゼミナール I	(選択科目) 地域文化振興論 地域イノベーション論 I インターンシップ A 地域行動コース特設講義 C		
	3年次後期 ・応用科目3年次計8単位 ・選択科目1～3年次計8単位	環境地理学 B ----- 住民ファシリテーション演習 B 地域行動論演習 D 地域協働実習 II*・地域フィールドワーク実習 II* 3年次ゼミナール II	(選択科目) 地域イノベーション論 II 地域行動コース特設講義 D		
	4年次前期	4年次ゼミナール I 卒業研究 (6単位) 特定課題研究 (4単位)			
	4年次後期	4年次ゼミナール II 卒業研究 (6単位) 特定課題研究 (4単位)			
	合 計				124

〔 教養教育科目の履修 〕

(1) ローカル科目, グローバル科目, 社会・文化, 自然・科学, 人間・生命

地域行動コース担当教員の科目の履修を奨めます。

〔 専門教育科目の履修 〕

(1) 学部基本科目

1年次前期に開講される入門科目については、「社会学入門」、「統計学入門」、「言語学入門」を中心に履修することを奨めます。

(2) コア科目

地域行動コースに所属を希望する学生は、1年次後期に開講される「コア科目」から、「社会調査論（必修）」のほかに2科目（4単位）を選択して修得する必要があります。

(3) 社会調査実習Ⅰ・Ⅱ, 地域アクションリサーチ実習Ⅰ・Ⅱ, 地域フィールドワーク実習Ⅰ・Ⅱ, 地域協働実習Ⅰ・Ⅱ

実習科目（履修モデルのアスタリスク*付き）は選択科目ですが、卒業研究をおこなう力を培うために、とても重要です。これらの実習科目の中から4単位を履修することを推奨します。

(4) 2年次以降の講義・演習とゼミナール・卒業研究（又は特定課題研究）

地域行動コースで開講される授業科目は、講義、演習と実習、ゼミナール・卒業研究と相互に密接した関係をもっています。4年次での卒業研究（又は特定課題研究）を念頭において、2年次以降に開講される授業の履修計画を立ててください。基礎から応用へと科目内容は高度化しますので、系統的な履修が求められます。

3年次以降は、教員が個別に開講するゼミナールに所属し、卒業研究（又は特定課題研究）に向けての専門的な指導を受けることになります。

(5) 選択科目

選択科目は地域行動コース特設講義及び本コースの学習内容と関連の深い他コースの授業です。学生のみなさんの関心に基づいて履修してください。

(6) 本学部及び他学部で開設している教養教育科目 又は専門教育科目

地域行動コースでは、卒業に必要な単位のうち20単位（特定課題研究を選択する場合は22単位）は適宜選択科目としています。これには本コース開講科目はもちろん、本学部の他コース・他学部の開講科目を含むことができます。教養教育科目は4単位までとする。なお、別表第6教職に関する科目及び別表第7学芸員の資格を取得するための授業科目の中の必修科目（「博物館概論」、「博物館経営論」、「博物館情報・メディア論」、「博物館教育論」を除く）は、含めることはできません。

4) 言語コミュニケーション実習の履修の仕方

言語コミュニケーション実習	定員	開講時期	備考
I A (英語)	90	2年前期	多文化共生コース必修科目
I B (英語)	90	2年後期	多文化共生コース必修科目
II A (英語)	90	3年前期	多文化共生コース必修科目
II B (英語)	90	3年後期	多文化共生コース必修科目
III A (英語)	60	4年前期	
III B (英語)	60	4年後期	
I A (多言語)	90 (各言語 30)	2年前期	多文化共生コース必修科目
I B (多言語)	90 (各言語 30)	2年後期	多文化共生コース必修科目
II A (多言語)	60 (各言語 20)	3年前期	
II B (多言語)	60 (各言語 20)	3年後期	

言語コミュニケーション実習 (英語)

1. 【科目の目標】

高度な英語の運用能力を総合的に養い、卒業後の進路に英語力を生かせる人材になることを目標とします。

2. 【授業の種類】

総合的な英語力の養成のために、原則として、言語コミュニケーション実習 (英語) A と言語コミュニケーション実習 (英語) B を組み合わせて履修します。

○言語コミュニケーション実習 (英語) A : 英語による高度なコミュニケーション能力を養成します。

○言語コミュニケーション実習 (英語) B : 高度な英文読解力を養成します。

3. 【履修登録の方法】

1) 多文化共生コースの学生の場合 :

言語コミュニケーション実習 I A (英語), 言語コミュニケーション実習 I B (英語), 言語コミュニケーション実習 II A (英語), 言語コミュニケーション実習 II B (英語) は必修科目です。それぞれの開講時期に必ず履修してください。

言語コミュニケーション実習 III A (英語), 言語コミュニケーション実習 III B (英語) は選択科目ですが、履修を強く勧めます。効果的な学習のため、両科目を合わせて履修してください。

2) 多文化共生コース以外のコースの学生の場合 :

言語コミュニケーション実習 I A (英語), 言語コミュニケーション実習 I B (英語), 言語コミュニケーション実習 II A (英語), 言語コミュニケーション実習 II B (英語), 言語コミュニケーション実習 III A (英語), 言語コミュニケーション実習 III B (英語) は選択科目です。効果的な学習のため、I, II, IIIそれぞれのAとBの両科目を合わせて履修してください。

4. 【履修の準備】

2年次から言語コミュニケーション実習 (英語) を履修するためには、1年次後期の教養教育「英語」において、前期に引き続き4単位を履修しておく必要があります。特に、多文化共生コースを志望する学生はこの点に注意してください。

5. 【II以降の履修】

言語コミュニケーション実習 I A (英語), 言語コミュニケーション実習 I B (英語) の両科目を修得後、IIの科目に進みます。IIの両科目を修得後、IIIの科目に進みます。但し、自動

的に進めるわけではなく、下記に定められた外部検定試験の結果による条件を満たしていなければⅡ以降の科目は履修できません。

外部検定試験	Ⅱの履修要件	Ⅲの履修要件
TOEIC	530	580
TOEFL (iBT/ITP)	55	60
IELTS	5	5.5

注意

- 1) 多文化共生コースの学生の場合：上記に定められた外部検定試験の結果による条件を満たしていれば履修が認められます。
- 2) 多文化共生コース以外のコースの学生の場合：履修希望者が定員を超えた場合、上記に定められた外部検定試験の結果の上位の者から選抜されます。

言語コミュニケーション実習（多言語（ドイツ語・フランス語・中国語））

1. 【科目の目標】

ドイツ語、フランス語、または中国語について応用的な学習を行い、ある程度の実用レベルに到達することを目標とします。

2. 【授業の種類】

総合的な語学力の養成のために、原則として、それぞれの言語のAとBを組み合わせて履修します。

- 言語コミュニケーション実習（多言語）A：演習および読解の授業を行います。言語によっては、検定試験の準備を実施します。
- 言語コミュニケーション実習（多言語）B：当該言語のコミュニケーション能力を養成します。

3. 【履修登録の方法】

1) 多文化共生コースの学生の場合：

言語コミュニケーション実習ⅠA（多言語）、言語コミュニケーション実習ⅠB（多言語）は必修科目です。コース所属希望時に、必修科目としてどの言語を選択して履修するかを申し出ます。その結果、当該言語の言語コミュニケーション実習（多言語）に履修登録されます。

言語コミュニケーション実習ⅡA（多言語）、言語コミュニケーション実習ⅡB（多言語）は選択科目ですが、履修を強く勧めます。効果的な学習のため、A、B両科目を合わせて履修してください。

2) 多文化共生コース以外のコースの学生の場合：

言語コミュニケーション実習ⅠA（多言語）、言語コミュニケーション実習ⅠB（多言語）、言語コミュニケーション実習ⅡA（多言語）、言語コミュニケーションⅡB実習（多言語）は選択科目です。

効果的な学習のため、それぞれの言語のⅠ、ⅡそれぞれのAとBの両科目を合わせて履修してください。

4. 【履修の準備】

言語コミュニケーション実習（多言語）の授業は、1年次後期の教養教育「多言語」において、当該言語の多言語Ⅱを履修していることを前提とした内容の授業を行います。したがって、どのコースの学生であっても、言語コミュニケーション実習（多言語）を履修するためには、当該言語の1年次後期の教養教育「多言語Ⅱ」を受講することを強く勧めます。

5. 【Ⅱ以降の履修】

言語コミュニケーション実習ⅠA（多言語）、言語コミュニケーション実習ⅠB（多言語）の両科目を修得後、Ⅱの科目に進みます。

6. 所属の変更

所属の変更には、転学部、転コース、転ゼミナールがあります。これらは、一定の範囲と条件で可能ですが、受入人数の制限、取得単位等の要件、また選考などの条件があります。変更が認められても、場合によっては、卒業に4年を超えることもあるので、慎重に考えてください。

①転学部

人文社会科学部から他学部への変更については、当該学部の教務担当に尋ねてください。

②転課程

課程の変更は、2年進級時以降各学期開始時に認められることがあります。

転課程はコース変更を伴います。その受入人数は、希望する課程・コースの定員に空きがあるかどうかによりますが、選考があります。選考については、入試の成績と入学後の成績等も参考にします。3年進級時以降の転課程は、ゼミナール変更も伴いますので、ゼミナール所属要件を満たし、かつ志望ゼミナールの受入人数に空きがある場合となり、担当教員の選考を受けることとなります。

③転コース（所属している課程の中での転コース）

コースの変更は、2年進級時以降各学期開始時に認められることがあります。

その受入人数は、希望するコースの収容人数に空きがあるかどうかによります。また、ゼミナール所属後のコース変更は、ゼミナール変更も伴いますので、ゼミナール所属要件を満たし、かつ志望ゼミナールの受入人数に空きがある場合となり、担当教員の選考を受けることとなります。

なお、自分の所属課程以外の他課程のコースへの変更は、結局転課程になりますから、上の②になります。

④転ゼミナール（所属しているコースの中での転ゼミナール）

ゼミナールは、原則は3年次と4年次に同じゼミナールに所属しますが、例外的に3年後期開始時、4年進級時に変更が認められることがあります。

なお、自分の所属している課程であっても、他のコースのゼミナールへの変更を希望する場合は、転コースとなりますから、上の③になります。

また、他の課程の他コースのゼミナールへの変更を希望する場合は、転課程となりますから、上の②になります。

※上の②③④のいずれの場合も、人文学社会科学部教務担当へ尋ねてください。

※なお、ハラスメントによる所属の変更希望は、緊急性が高いので、随時対応します。前頁の「異議・苦情申し立て」を参照してください。

7. 進路

1) 就職について

(1) 人生の重大な選択としての就職

就職は、人生の重大な選択です。自分にとって最も良い就職先とはどこなのか、自分自身にわかりません。**自己分析**（自分はどのような性格で、何が向くのか）、**職業観**（どのような仕事をしたいのか）などについては、日頃からよく考えておく必要があります。

(2) 就職活動は入念な準備が必要

就職活動は、様々な準備から実際の活動まで、全て自分自身で行わなくてはなりません。知らなかったために時期を逃してしまった場合、やり直したり、追いついて取り戻したりすることができません。むやみに焦る必要はありませんが、適切な時期に必要な準備を行い、自分自身の納得できる就職ができるようにしましょう。

1・2年生の間は、勉強や部活・サークル、課外活動、社会活動、留学など、色々なことに挑戦し、自分自身を向上させましょう。

3年生になったら、就職活動の準備を始めましょう。自分の適性や就きたい職業について具体的に考えてください。**自己分析**、**筆記試験**の準備、**インターンシップ**、**エントリーシート**の準備など、いわゆる解禁日前に、やるべきことはたくさんあります。就職活動は、解禁日に開始するのではなく、解禁日に開始できるように準備をしておくことが重要です。

公務員や教員を志望している人は、試験科目や試験内容等について早めに情報を集め、1・2年生時から試験関連科目を計画的に履修してください。

2) 就職支援体制

就職を支援する体制として、弘前大学には**キャリアセンター**が、人文社会科学部には**就職対策専門委員会**があります。

(1) キャリアセンター

合同企業説明会や**就職ガイダンス**を行って、就職に関する様々な情報を提供します。弘前大学学生を対象とした企業からの求人票が届くのもキャリアセンターになります。

常駐する専門のスタッフが個別の相談に対応します。弘前大学のホームページから、キャリアセンターに入ると、Web上で詳しい情報を見ることができます。1・2年生のうちから、積極的に利用してください。

(2) 就職対策委員会

人文社会科学部の学生を対象としたガイダンスを開催します。

就職活動は、正確な情報を入手することが重要です。学部でのガイダンスでは、年々変わる就職活動のスケジュールや方法、人文社会科学部学生に必要な情報や準備方法などを、具体的に伝えます。

ガイダンスの日程や内容は、掲示や配付物で知らせます。掲示には常に注意し、必ず出席するようにしてください。

3) 就職関係の情報について

社会の変動とともに、就職情報は刻々と変わります。一年上の先輩からの情報は、参考にはなりますが、同じように行ってOKという訳ではありません。全学主催・学部主催の就職ガイダンスには必ず出席して、最新の情報を得ましょう。

就職関係の情報は、担任教員や指導教員から提供されることもありますが、基本的には自分自身で「取りに行く」ことが重要です。**キャリアセンター**や、人文社会科学部の就職関連の掲示や告知する配付物には注意し、各種ガイダンスには必ず出席するようにして下さい。

ガイダンスでは、最新の就職関連情報や、就活のスケジュール、インターンシップ情報、自己分析や企業研究の方法など、重要で具体的な情報が与えられます。

4) 進学について

卒業後の進路としては、就職のほか、**大学院への進学**というものがあります。大学院では、学部での研究をさらに深めていきます。弘前大学には、**大学院人文社会科学部研究科(修士課程)**が設置されており、さらに研究を深めたい人には、**弘前大学大学院地域社会研究科(博士課程)**があります。進学については指導教員に相談してください。

人文社会科学分野の場合、民間企業等への就職のためのキャリアアップとしての大学院進学はあまり一般的ではありません。新規採用の対象として、学部の卒業生だけを考えている企業等も多く、

大学院へ進学することによって、就職先が制限される場合もあります。教員や公務員の場合は、専門性の高い学習をしている学生が望まれることがあります。大学院への進学については、もっと研究したいという意欲が大事なのももちろんですが、志望する職業など、将来のことをしっかり考えておくことも重要です。

8. 資格取得

近年、資格取得を考える学生が増えています。学部の授業科目が資格取得に役立つものがありますが、それについては自分で情報を集めてください。またその一部についてはコースのガイダンスで紹介されることもあります。

ここでは資格取得が、人文社会科学部のカリキュラム上、認定または設定されているものを紹介し、要点を説明します。

当該資格取得が、現在、カリキュラム上認定または設定されているものとしては、(1) 教育職員、(2) 博物館学芸員、(3) 社会調査士の3種があります。

詳しくはそれぞれのガイダンスで情報を得てください。

1) 教育職員免許状

人文社会科学部で取得できる教育職員免許状は、中学校教員の普通免許状と、高等学校教員の普通免許状です。教科は、「国語」「社会」「地理歴史」「公民」「商業」「英語」です。これらの免許状を取得するには、規則によって定められた一定の履修方法が必要ですから、それに沿った履修計画を立てなければなりません。

そのための第一歩が「教職ガイダンス」への出席です。ガイダンスでは、免許状を取得するための手順、履修すべき授業科目と単位数、教育実習の手続きなどの説明があります。入学直後にガイダンスがありますので、掲示に注意し、必ず出席してください。

2) 博物館学芸員の資格

学芸員資格を取得するにはいくつかの方法がありますが、大学の学部在学中に所定の単位を修得するのが一般的です。

しかし、学芸員資格そのものは教員免許とはかなり性格が異なります。実際の採用にあたっては、単に資格を持っているだけでは困難であり、また専門的知識や経験の有無がかなり左右します。採用の時期も不定期です。

履修すべき科目等、また職業としての学芸員のあり方やその採用状況などについては、「学芸員課程ガイダンス」で説明されます。

3) 社会調査士の資格

社会調査士の資格を取得するためには、社会調査士資格認定機構が認定した機関(大学等)で標準カリキュラムに対応した科目を履修し、単位認定を受けなければなりません。

人文社会科学部はこの認定を受け、必要な科目が設置されました。これらの科目やその履修の仕方など、また資格取得までの具体的手順についても、「社会調査士資格取得ガイダンス」で説明されます。